

乳悪しくなり、水氣多く、養分は味と共に薄くなり、之を飲める幼児は、身體の生育宜しからず、諸種の疾病を起すこと、また疑なきことであります。

終に一言添へ置ますことは、幼児を戸外に出し新鮮の空氣中に運動せしむることは、何れの時にも、其の健康の爲最も宜しきことであります。特に斷乳の時期に至りては、食物の消化を奨め、病を未發に防ぎ、益々育をよくする爲には、類なき功益あるといふことであります。



## 史傳

ヴィクトリア女皇 (ついで)

鄭越生補譯

かくて、女皇陛下には、追々と御壯健に、御肥立ち遊ばしまして、とき／＼その愛らしき、薔薇色の小き頬に、無限の愛嬌をたへて、笑ませたまふやうに、なられましたので、父公爵の御鍾愛は、また一入でございまして、殆んど、しばしも御懷をはなしたまひし事なく如何に御忤懣の方々にも、女皇を抱かせたまはず、唯しば／＼公爵家に出入をいたし居りまして、殊の外公爵一家の、御信仰あつた。或る僧正のみは、折々女皇を抱き奉るといふ、無上の名譽を、うくること

が出来るのでございませうが、夫さへ公爵は、御心配に  
たまらず、又僧正もなれぬ事とて、見るから恐々らし



く、抱きまゐらすので、猶更父公爵は、氣が氣でなく、  
立ちたり、居たり、絶えず

危ないー 危ないー

氣を附けよー 氣をつけよー

抱き上ぐるより、抱き下すまで、口癖のやうに、云つて  
居らるゝ位で、かざしの花とも、たなごゝるの上の珠  
とも、何とも彼とも、譬へやうはございませぬ。

其冬の事でございませうが、女皇の玉體にとり、誠  
に由々しき出来事が、突然に起りました、それはつい  
近隣に住んで居る、百姓の若者が、小鳥を射やうと  
しまして、公爵邸の本立に、一發打ち込みました、が、  
不幸にして狙をのやまり、女皇の哺育室の、硝子障子  
を打ちくだき、折しも女皇に侍りて居りました、乳母  
の肩先きに打ちこまり、のこる散弾は、彼方の壁にば  
ら〜と、どまりました事でございませう、幸に女皇に  
は、何の御怪我もございませんで、何よりでございま  
した、が、一時は稚き御心にも、定めて驚き給ひしこと

思はれます。

其翌一千八百二十年の春、公爵には御病氣にかゝられまして、とう／＼御薨去なさいました、初めは唯一



寸した感冒のやうで、御氣分勝れたまはずとて、御病床に入らせ給ひしが、思ひもかけず、御なくなりなさ

史傳 ヴィクトリア女皇

つたのでございます、一體に死といふことは如何なる場合にも、よき事ではございせんが、せめては女皇の御成人あそばし、御即位あらせられます迄も、長らへ

給ひしならば、公爵は勿論女皇陛下にも。此上なき御満足であらせられたらうに、天壽と申すものは、貧富貴賤に論なく、人力の如何ともすべからざるものと見へます。

是より二三年程、しまして、女皇は例の如く御車に召させられ、小さな驢馬に牽かせつゝ、近郊を御散策なされて居られましたが、馬は何に驚さてか、一散にかけ出したが、如何に手綱を引きしほるとも、止まらな

そ、とう／＼御車を泥溝の中に引き込みましたので、女皇は眞逆に墜下せんとしましたが、此時遅く彼時

速く、下より女皇を抱き止めたものがございました、それは折よく、此處を通りかゝりし、一青年軍人が、それと見るより、蒼惶しく駆けよりて、女皇を救ひ参らせたのでございます、此時この軍人は、若干の金子を頂戴して、御賞賛にあづかりました、後女皇御即位なされてから、程經て一千八百七十八年、此軍人の老夫妻は、憐れなる境遇に陥りましたので、據なく七十年前の此出来事を口實に、養老金を歡願に及ばれました、そこで女皇は有史に命じて、篤と事實を御調べになりましたが、固く眞實でございますから、誠に氣の毒であると仰せ出され、終身年金を老夫婦に與へられました、仁露枯木に及ぶとは、かゝる有難き事を申すのでございませう。

かくだんく御成長あそばすにつれ、將來大國の君主たるべき御氣象は、自然に備はりまして、殊に仁慈

の御心深く、貧人や孤獨の人を見ては、常に不慙に思召され、同情の御涙禁じあへたまはず。

是は其一例でございますが、或日女皇には、保姆に伴に、御散歩なされておられました、道に、賤しき乞食を御觀になりまして、慇懃と思召されて、

貧人！ 貧人

と仰せられ、一シリングの銀貨を、御與へなされました、するとこの乞食は、一方ならず仰天し、且つ有難くて、しばし呆れて居りましたが、感極まりてか、矢庭に女皇を抱き上げ、熱き接吻を涙とともに捧げました。

是れ亦一例でございます、女皇一日或る人形店にて、人形を御購めになり、いそぐとして、御歸りにならんとする途すがら、一の貧人に出逢はれました、貧人は聲も細くいふやう、

高貴の姫君よ、憐れなるものを、救ひたまへや、

女皇はつく／＼と御覽になりまして、可愛うであるが、生憎今人形を購めたので、金子はなし、困つたとである、御心配になりましたが、如何ともせん方がございませんで、

氣の毒だが

と、御断りになりましたので、貧人は世にも失望したらん如く、立ち去らんとしますと、女皇は急に氣づきたまひし如く、

御待ち、御待ち、今あげますから、

と云ひすてたまひ、最前の人形屋にと戻りたまひ、買ひ戻せよと仰せられました、人形屋では、不思議に思ひましたが、大切の御得意さまでございますから、快よく金子を、御返しいたしますと、女皇は御喜びなされ、直ぐ貧人に、そのまゝ御與へになりました。(未完)

ローランド夫人 (つゞき)

鄭越生補譯

幸にして、ギロンド黨の勢力漸く強く、一千七百九十二年の春、同黨員の多數により、新内閣の組織せらるゝに及び、ローランド氏、入りて内務大臣となる。當時人々唯家を懷ひ、公徳地を掃つて求むべからず、賄賂公に行はれ、苞苴夜る門に忍ぶ、百官悉く公盜、僚屬悉く汚吏、一世を擧げて、銅臭紛々たるの時、氏の如き、公正廉潔なる國士を得て、閣臣に列す、新内閣のために、大に喜ばざるべからず。

然れども、莊嚴傲慢を以て、歐洲に名高きルイ十六世王の佛蘭西宮室、今や俄に此の一野人を迎へんとす、滿廷の驚異仰々幾何ぞ、昔者平忠盛昇殿を許されて舉朝側目反齒しき、地を異にし、風を同じくせずといへども、事實に於ては一なるべし。